(二) 南海と火事

ある日、南海はいつもの如くイヌと猿を供にし、米ヶ森の参道を登っていった。村はちょうど田植えの終った頃で眼下には美しい青田が続き、その中を荒川が銀蛇のように曲りくねって流れ絵のようだった。またしばらくあがって何気なくふりむいた南海は、村の杉木立のかげからむくむくと立ちのぼる黒煙を見た。さては火事かと思う間もなくメラメラと火焔があがり始めた。南海はすばやく九字をきり呪文を唱えた。すると不思議、晴天の一隅に忽然と一叢の黒雲が生れ、またたく間に流れ来て猛火の上を覆たかと思うと、篠つく大雨となりさすがの烈火も見る間に消えた。消火にあたっていた村人達は、雨の中にぼんやり立つて、あれよあれよとこの奇異に驚くばかりで、さて不思議なこともあればあるものよと互いにつぶやきながらホットして散っていった。

その後村人の一人が、山伏にこの不思議を話したところ、南海は微笑し「去る十日の朝五つ頃、拙僧米ヶ森に参詣の途中あの火事をみて、雨を乞うたら幸いにして大雨となり、火事を消すことができた。この雨は、玉の明神に願つて得たものであるから、汝等も玉の明神を敬い尊びたまえ」という。百姓はさては南海様のお力でしたかと大いに喜んだ。だが百姓は明神様を知らなかったので「その玉の明神とは、どこの国の神様でしようか」と聞くと、「面日の山奥にあり、昔、恒武天皇の御代に大滝丸という賊を征伐する為、坂上田村麻呂将軍がきたが、賊もさるもの頑強に抵抗するため、将軍は玉の明神に参詣し、その御教えをうけて遂に本望をとげたものだ」と教えた。百姓は村に帰つてその話をしたため、米ヶ森には勿論、玉の明神にも参詣する人々がふえたという。